

花園大学文学部研究紀要 第五五号 二〇三三年三月 抜刷

『竹取物語』 庫持皇子条・再読

曾根誠一

『竹取物語』 庫持皇子条・再読

曾根 誠 一

はじめに

竹取の翁は、竹中にかくや姫を発見して持ち帰り、養育開始後僅か三か月で、「髪あげさせ、裳着す」と、姫は成人する。そのかくや姫に対する求婚者として殺到した、「世界のをのこ」は、三年に亘る姫及び、翁家主従の無視という冷淡な対応に、経済力を主因とする、愛情の劣る「おろかなる人」が脱落し、「色好みといはるるかぎり五人」の上流貴族に絞り返まれることになる。

この五人の求婚者中で、かくや姫との結婚成就寸前、「翁は、閨のうち、しつらひなぞす」まで、姫を追い詰め得たのは、唯庫持皇子のみであった。

かくや姫は、庫持皇子提出の「蓬萊の玉の枝」を作製した、「鍛冶工匠六人」による「祿」請求の直訴と、その根拠となる事情を記した、「奉る文」を受け取るまで、提出物を本物

と思い込んでいたことが、次の叙述によって知られる。

……かくや姫、暮るるままに思ひわびつる心地、笑ひさかえて、翁を呼びとりていふやう、「まこと蓬萊の木かとこそ思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや返したまへ」といへば、翁答ふ、「さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむこと、いとやすし」と、うなづきをり。

かくや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ。(新編日本古典文学全集本、35頁。傍線は稿者、以下同じ。以下「新編全集本」と略称する)

庫持皇子提出の「蓬萊の玉の枝」は、作製された贋物であ

ることが、当事者である「鍛冶工匠」によって証明された結果、意に反して結婚を承引するしか術がなく、鬱屈していたかぐや姫の心は、「笑ひさかえて」「まこと蓬萊の木かこそ思ひつれ」と、本物と思ひ込んでいたことを告白し、「心ゆきはてて」、皇子の贈歌に対する返歌「言の葉をかざれる玉の枝にぞありける」を「いひ」（作成し）て、求婚を拒絶し結着するのである。

だが、提出された贖物を、かぐや姫が本物と思ひ込むに至る物語展開は、どのように緻密に準備され、叙述されているのであろうか。その分析を主としながら、庫持皇子条を、改めて読み直して見たいと思う。

一

先ず、「色好み」五人に対する結婚の条件としての難題提示は、次のように叙述されている。

かぐや姫、石作の皇子には、「仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」といふ。庫持の皇子には、「東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。いま一人には、「唐土にある火

鼠の皮衣を賜へ」。大伴の大納言には、「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ」。石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」といふ。（24頁）

右の五つの難題の内、石作皇子に課された「仏の御石の鉢」には、「といふ」、庫持皇子の「蓬萊山」には、「といふ」に加えて、伝聞の助動詞「なり」が使用されていて、かぐや姫は、天竺と蓬萊山にある課題の物品を、実見している訳ではないことが、明示されている。その一方で、唐土にある「火鼠の皮衣」と、国内に存在する「龍の頸の玉」「燕の子安貝」には、伝聞表現が使用されていない。その差異に基づいて考えれば、かぐや姫は、これら三つの課題の物品については、実見し確認していたことになろう。⁽¹⁾

かぐや姫が、庫持皇子に対して難題を課す時点で、「銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木」と、「蓬萊の玉の枝」の詳細を説明してしまったことは、既に、奥津春雄氏⁽²⁾が指摘されているように、皇子が「鍛冶工匠」に、贖物を作製させることが可能となる、「伏線」（296頁）になっているのであるが、それに加えて、姫が真贋を判断する手懸かりを、自ら喪失する結果になっていることも、確認しておきたい。⁽³⁾

では、かぐや姫は、何故に「蓬萊の玉の枝」の詳細を、説明してしまっただけであろうか。この点に關する言及は、従來の研究に見られず、かぐや姫の單純な錯誤と理解されてきたようである。

だが、「玉の枝」提出後に、かぐや姫の部屋の「縁に這ひのほり」、翁に問われるままに語る、庫持皇子の贗「蓬萊山訪問談」を確認すると、「世の中になき花の木ども立てり」、「この取りて持ちてまうで来たりしは、いとわろかりしかども」と説明している発言に対して、室内で聞き耳を立てる姫は、不審を抱かず、異を唱えていない。それを考えると、蓬萊山に自生する「花の木」は、人間世界のそれと同様に、複數種類あつたと、かぐや姫もまた理解していたようなのである。

そこで、蓬萊山の出典と理解されている『列子』湯問篇を確認すると、「渤海之東」にある「蓬萊」を含む五山には、「珠玕之樹皆叢生」（新釈漢文大系本、215頁）と記されている。「珠玕之樹」という叙述は、『淮南子』地形訓の「崑崙の虚を掘りて、以て地に下す。中に増城の九重なる有り（中略）上に木禾有り、其の脩さ五尋。珠樹・玉樹・璇樹・不死樹、其の西に在り。沙棠・琅玕、其の東に有り。絳樹、其の南に在り。碧樹・瑤樹、其の北に在り」（新釈漢文大系本、204・207頁訓讀文）の

ような、個別の仙木を指すのではなく、「珠」（玉）と「玕」（玉に次ぐ美石）「之樹」という、蓬萊山に自生する玉の木の総括的表現なのであろう。⁵⁾ すなわち、蓬萊山には、複數種類の玉の木が自生していることが、確認されるのである。

それ故に、かぐや姫が庫持皇子に課題を提示する時、「蓬萊の玉の枝」という概括的表現を用いることができず、具体的形状を説明して、特定する必要があつたのであろう。その結果、贗物の作製が可能となつたのである。

このことを確認した上で、庫持皇子条の叙述を、冒頭部から読み直すことを通して、かぐや姫が贗物を本物と信じ込んでゆく過程を、確認するとともに、従來の読みを再検討してみたいと思う。

先ず、都を出発して、難波の港に向かう叙述から、検討を加えてみたい。

庫持の皇子は、心たばかりある人にて、朝廷には、「筑紫の国に湯あみにまからむ」とて暇申して、かぐや姫の家には、「玉の枝取りになむまかる」といはせて、下りたまふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送りしける。皇子、「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまた率ておはしませず。近う仕うまつるかぎりしていでた

まひぬ。御送りの人々、見たてまつり送りて帰りぬ。

「おはしましぬ」と人には見えたまひて、三日ばかりありて、漕ぎ帰りたまひぬ。(27頁)

「心たばかりある人」たる庫持皇子は、朝廷には、筑紫国での湯治のための休暇を申請し、かぐや姫のもとには使者を派遣して、蓬萊山への旅立ちを報告させた上で、難波の港に下向している。「仕うまつるべき人々、みな難波まで御送り」しての出航は、奥津氏が指摘されるように、「半分は(朝廷と世間の人々に対する)曾根注) 宣伝のため、半分は邸の家族・召使いをも騙すため」(296頁)であり、この時点で、「車持皇子は、表向きは筑紫に湯治に行くということにして、「いと忍びて」船出した」(297頁)のであって、皇子に随行する従者を、「近う仕うまつるかぎり」に限定したのは、玉の枝の贋物作製の秘密の漏洩防止を主としつつ、作製する「たはやすく人寄り来まじき家」の狭隘さのためであつたろう。すなわち、朝廷や世間の人々と、庫持皇子邸の家族や従者が、皇子は筑紫に赴いたと理解している以上、かぐや姫のもとに派遣された従者も、皇子に随行しているのである。

かぐや姫から課された難題の情報が、求婚者家の従者と共有されていたのか否かは、区々であつたようである。

石作皇子の場合、かぐや姫には、「今日なむ、天竺に石の鉢取りにまかる」と、使者に報告させて、「三年ばかり」、大和国十市郡周辺の山中(山寺坎)に身を隠していたようのだが(朝廷に対する休暇申請の理由は不記載である)、求婚者五人中で最も身分の高貴な皇子が、この間、生活上の雑事を自ら担ったとは考え難い。舎人の同行はともかくとして、少数の従者は、同行していたはずのだが、具体的には記されていない。少なくとも、かぐや姫のもとに派遣された使者は、姫に課された石作皇子の課題を熟知しており、皇子に同行したものと推測される。すなわち、かぐや姫に課された難題のことは、庫持皇子の場合と同様に、極一部の従者を除いて、知らされてはいないようなのである。

それに対して、阿部御主人の場合は、「火鼠の皮衣」入手のために、小野房守が御主人の手紙と砂金を携行して、唐土の王慶の元に派遣されており(警護のための従者若干名も、同行したはずである)、このことは、従者間で共有されていたであろうから、熟知していたものと考えられる。ただ、異国である唐土への出国には、朝廷の許可が必要であつたはず(渡海制)なのだが、その詳細は、省略に付されている。

大伴御行の場合は、「我が家にありとある人」を集めて、「龍

の頸の玉」の入手を指示しており、石上麻呂足の場合も、「家に使はるるをのこども」に、「燕の子安貝」の情報提供を求めていて、かぐや姫に課された難題の情報は、従者と共有されている。

以上のように、「天竺」や「蓬萊」という、赴くことが困難な地域に存在する難題を課されて、入手のための正統な行動を取らず、贖物で代替してかぐや姫を欺こうとする場合に、秘密保持のための対策として、難題の情報を管理する必要が生じ、従者との共有は、回避されることになったのであろう。

二

出航三日程後の深夜に、庫持皇子は、難波の港に漕ぎ帰り、事前に指示して呼び寄せておいた「その時、一の宝なりける鍛冶工匠六人」と合流し、他人が容易には近づけない家造って、そこで、かぐや姫の提示通りの贖物を、作製することになるのである。

その場所について、東望歩氏は、「数日後ひそかに都へ戻って召し抱えた鍛冶工匠たちとともに隠れ過ごす」(1頁)と、庫持皇子は秘密裡に、奈良の都(藤原京であろう)に戻り、都内に居を構えて作製したと指摘されるのだが、人目の多さ

と露見の危険性を考えると、如何であろうか。奥津氏が「多分山奥に作ったであろう玉作りの工房に入った」(296頁)と、指摘されるのが穩当であり、敢えていえば、摂津国と大和国の間に位置する、生駒山中であつたように思われる。

「かぐや姫のたまふやうに違はず」作製した贖物は、緻密な計算に基づいて、人目に触れにくい深夜に、山中から難波の港に運び出され、庫持皇子は、再び出航したのであつて、東氏の指摘される「皇子は再び都を抜け出し」(1頁) た訳ではあるまい。贖物の完成後、役割を終えた「鍛冶工匠」は、秘密の露見回避を主因として、庫持皇子とは別行動を取り、先に都に帰還したのであろう。

その後は、次のように展開することになる。

「船に乗りて帰り来にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。迎へに人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物おほひて持ちて参る。いつか聞きけむ、「庫持の皇子は優曇華の花持ちて上りたまへり」とのしりけり。

これを、かぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。(28頁)

三年前の難波出航時、その目的は、筑紫国での湯治であつ

ただから、庫持皇子は、健康を回復して戻って来たはずなのに、帰航時の皇子は、「いといたく苦しがりたるさま」と、疲労困憊した状態で座り込んでいる。

この時点で既に、庫持皇子の行動は、出航時との矛盾を無視し、世間の人々の記憶の醜化と、噂の一過性に付け込んで、かぐや姫との結婚成就を最優先し、蓬萊山から帰国したという前提での、緻密な計算に基づいてなされている。

留守郎を守っていた迎えの大勢の従者と共に、都を目指す庫持皇子は、「玉の枝」を納めた長櫃に覆いを掛けただため、世間の人々は、「優曇華の花」と勘違いして噂し、大騒ぎしている。この混乱は、奥津氏が指摘される「民衆は、なんだか分からないがえらい宝物らしいというので、日頃説法場で聞き覚えた優曇華を想像した」(297頁)ことに、起因しているのであろう。

問題は、この噂を聞き付けたかぐや姫の反応、「我はこの皇子に負けぬべし」である。日本古典集成本は、「かぐや姫は庫持の皇子の奸計を全く見抜くことができず、情況のままに一喜一憂する人間として描かれている」(23頁頭注一二)とし、新日本古典文学大系本は、「かぐや姫は前話とは対照的に、皇子のたくらみが見抜けず、玉の枝を受け取る前の段

階で自分の負けを覚悟する」(16頁脚注九)、「敗北を恐れて一喜一憂する人として描かれる」(同一〇)と付注している。

世間の噂「優曇華の花」を聞き付けたかぐや姫は、庫持皇子に敗北するかも知れないと、不安を抱くことはあり得ようが、「負けぬべし」と、強意の助動詞「ぬ」と当然の助動詞「べし」を使用して強調し、「胸つぶれ」る思いで敗北を覚悟しているのは、姫に思い当たることがあったためではないのだろうか。

それは、「皇子の奸計を全く見抜くことができず」や「皇子のたくらみが見抜けず」「敗北を恐れて」のことではなく、かぐや姫が結婚の条件として難題を提示した時点で、蓬萊山に自生する複数の木の中から特定すべく、「蓬萊の玉の枝」に関する具体的な情報、「銀を根とし、金を莖とし、白き玉を実として立てる木」を開示してしまっており(葉と花の説明はなく、問題とされてもいない)、それに従って庫持皇子が作製すれば、真贋を判別する方法がないことに、姫自身が気付いたからだと思うのである。

この時点でのかぐや姫は、庫持皇子が持参する「蓬萊の玉の枝」に、疑念を抱きながらも、真贋を判別するための手段を持ち合わせていないのであり、求婚を拒絶する目処が立た

ない閉塞感・絶望感が、「負けぬべし」「胸つぶれ」る思いとして表現されている、と考えるのである。

三

帰京した庫持皇子が翁邸を訪問し、贖物の「蓬萊の玉の枝」を提出する展開は、次のように叙述されている。

かかるほどに、門を叩きて、「庫持の皇子おはしたり」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしたり」といへば、あひたてまつる。

皇子のたまはく、「命を捨ててかの玉の枝持ちて来たる」とて、「かぐや姫に見せたまつりたまへ」といへば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に、文ぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでさらに
帰らざらまし

これをもあはれとも見でをるに、竹取の翁、走り入りて、いはく、「この皇子に申したまひし蓬萊の玉の枝を、一つの所あやまたず持ておはしませり。何をもちて、とかく申すべき。旅の御姿ながら、わが御家へも寄りたまはずしておはしましたり。はや、この皇子にあひ仕うま

つりたまへ」といふに、物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに思ひたり。(29頁)

帰京した庫持皇子の翁邸到来が、「かかるほどに」と叙述され、「旅の御姿ながら」と重ねられる時、かぐや姫に対する愛情と誠意の深さを強調するため、難波の港から直行したという先入観を讀者に抱かせるのだが、実際は、「難波より、昨日なむ都にまうで来つる」(33頁)と皇子自らが語っていて、訪問の前日に都に到着している。庫持皇子が、何故に「昨日」の内に、翁邸を訪問しなかったのか、という問題については、「鍛冶工匠」による「禄」直訴の問題と絡めて後述することにし、今は、こうした問題が存在していることを指摘するに留めておく。

さて、提出された「蓬萊の玉の枝」には、和歌が付されており、たとえ命を失ったとしても、持ち帰って来たことであるろう、入手せずに空しく帰国したりはしないという、庫持皇子の熱意溢れる思いに対して、結婚回避のために難題を課し、求婚を退けようとしたかぐや姫は、「あはれとも見でをるに」と、心動かされることはない。

庫持皇子との結婚を望む翁は、「一つの所あやまたず持ておはしませり」と、提出された「玉の枝」が、かぐや姫の提

示通りの物品であることを確認し、「閨のうち、しつらひなどす」と、皇子との結婚準備を整えて行く。

それに対して、かぐや姫は、自ら実見し確認しても、贋物であることの証明はできず、本物と是認するしか術のない現状では、「物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに思」うしかない。そして、「取りがたき物を、かくあさましく持て来ることを、ねたく思ふ」かぐや姫は、提出された「玉の枝」を本物と認めて、結婚を受け入れざるを得ず、追い詰められて行くのである。

更に、翁からの「蓬萊の玉の枝」入手の経緯に関する問い掛けに、庫持皇子が展開する贋「蓬萊山訪問談」は、室内で聞き耳を立てているかぐや姫をも欺いて、提出された「玉の枝」が本物であることを補強し、結婚を確定する役割を果たすことになってゆく。

この「訪問談」に関して、関根賢司⁽⁸⁾氏は、翁と庫持皇子が「異郷の時間について無知だった」(145頁)として、次のように述べておられる。

往路の五百余日プラス逡巡の二、三日プラス帰路の四百余日、二年以下でも三年以上でもない、ちょうど三年以内ぎりぎりの帰還だったということになる。計算し

つくされた時間は、だが、あくまでも地上の／机上の時間であるから、くらもちの皇子は、蓬萊の山という異郷に降り立ったと言いはっているにもかかわらず、異郷の時間と交錯しなかったこと、すなわち異郷を体験しなかったことを、みずから暴露し、証し立ててしまっているのだ。

庫持皇子は、蓬萊山を訪問したのだから、仙界の時間を体得し、その滞在期間中に、人間世界では長い時間が経過したはずなのに、そのようには語られていないことを矛盾と理解し、「異郷を体験しなかった」こと、蓬萊山には到達していないことを、自ら暴露していると指摘されている。

その一方で、東氏は、「竹取物語」の作品世界において異界と俗界における時間の相対性は意識されている(10頁)にもかかわらず、「蓬萊訪問譚においては」、「現実の俗界と虚構の異界との間に流れる時間はなだらかにつながっている」、「時間の流れの相違が作為的に削除され」、「うかんるり」が名前を尋ねる問い掛けに答えず、「山中に入らなかつた皇子は、異界の時間に取り込まれることなく帰還する」と指摘されている。

さて、異郷を訪問し、人間世界とは異なる時間の流れを体

得するための条件は、その地を訪問し滞在すること——庫持皇子は、水を汲む仙女「うかんるり」を見出して上陸し、蓬萊山であることを確認した上で、山裾を辿って、「いとわか」る「蓬萊の玉の枝」を入手し、帰国の途に就いている以上、滞在は数時間程度であつたろう——だけで、充足されるのであろうか。この問題について、次節以下で検討してみたい。

四

先ず、「蓬萊の玉の枝」の典拠と指摘されてきた『列子』湯問篇の訓読文を引用すると、次の通りである。

革曰く、渤海の東、幾億万里なるを知らず、大壑有り。実に惟れ底無きの谷なり。其の下、底無し。名づけて帰墟と曰ふ。八紘九野の水、天漢の流れ、之に注がざるは莫きに、増すこと無く減ること無し。其の中に五山有り。

一に曰く、岱輿。二に曰く、員嶠。三に曰く、方壺。四に曰く、瀛洲。五に曰く、蓬萊。其の山、高下周旋三万里。其の頂、平処九千里。山の中間、相去ること七万里、以て鄰居と為す。其の上の台観は皆金玉、其の上の禽獸は皆純縞。珠玕の樹皆叢生し、華実皆滋味有り、之を食へば、皆老いず死なず。居る所の人は、皆仙聖の種にし

て、一日一夕、飛んで相往来する者、数ふ可からず。(新釈漢文大系本、215頁)

渤海の東にある「帰墟」という底なしの深い谷に、「蓬萊」を含む五つの山があり、その頂上の平地に生える「珠玕の樹」の「華実」を食すると、皆が「不老不死」の仙人になると記されている。すなわち、これに依れば、訪問するだけでは不十分で、「華実」を摂取することが、仙人になるための条件になっていることが知られるのである。

また、小川環樹氏⁽⁹⁾は、魏晉以降唐末五代までの「仙郷談」五一篇の説話に、「ほぼ共通に有すると考えられる要点」(267頁)八点を指摘される中で、仙人となる方法について、次のように述べておられる。

(3) 仙薬と食物。仙薬を与えられるか、またはそれ以外の食物をたべること。

丹薬を服用することは、前に述べたごとく、仙人となる方法の一つである。仙郷へ行った人が誰でも仙人となる資格があるとは限らない。が、その別世界にとどまる時間は短くても、その食物をとることが一つの条件となることを示すものなのである。同じ食物を分かつことが、その世界に参与する条件となることはいうまでも

あるまい。けれどもまた、仙郷の食物はそこにはいりこんだ人の誰にでも与えられるとは限らず、その食物がよき結果をもたらすとも限らない。(268頁)

八点の「この要素は、すべて具わっているとは限らない」(270頁)と断りながらも、「仙郷」を訪問した人間が、仙人になれるか否かの分岐点は、「仙薬」の服用か、その地の「食物」を摂取することに懸っていると指摘されている。

これに従えば、『列子』の事例は、「珠玕の樹」の「華実」を食することなので、「食物」摂取の事例に該当しよう。

そして、人間世界に帰還した時に、彼我の時間の流れに差異が存することについては、次のように指摘されている。

(7) 時間。仙郷における時間の経過速度を強調することは、かなり多い。

人間界と仙界とで、時間の尺度が全然ちがっていると
の観念は重要である。王質の話(『述異記』卷上および「水
経注」卷四十)は、浦島説話あるいは Rip van Winkle
型説話の典型的な形を備えている。いったい時間と生命
の持続とは不可分のものである。(270頁)

右に挙げられる王質についていえば、『述異記』⁽¹⁰⁾上巻では、石室山で木を伐る内に、「童子数人」が「棊而歌」のを見て(『太

平寰宇記』⁽¹¹⁾卷九七所引の『述異記』では、「二童子」が「対奕」するのを見、『水経注』⁽¹²⁾卷四〇所引の『東陽記』では、「童子四人」が「彈琴而歌」のを聞くとある)、「棊核」のような物をもたらって口に含むと、空腹を覚え、暫くして帰宅を促され、「斧」が「爛尽」していることに気付いている。戻った故郷は「無復時人」と記され(『太平寰宇記』は「百歳」が経過し、『水経注』は「数十年」が経過していたと記す)、長期間が経過していた。

この王質の場合は、「棊」の種のような物を口に含むことで、仙界の時間を体得しているのであり、これは、「食物」摂取の事例に包含されよう。

五

次に、日本の事例を検討すると、『丹後国風土記』逸文の「筒川の嶼子」(伊預部馬養執筆「水江浦嶼子」と内容は矛盾しない)が、海上の島である「蓬山」を訪れ、滞在したことは、次のように叙述されている。

女娘の父母共相に迎へ、拵みて坐にましき。ここに、人間と仙都の別を称説き、人と神の偶会の嘉を談議れり。乃ち百品の芳き味を薦む。兄弟姉妹等、坏を挙げ献

酬せり。(中略) 仙歌は寥亮き 神儻は透逸なり。それ、
飮宴のさま、人間に万倍れり。ここに日の暮るるを知ら
ず。(中略) 肩を双べ袖を接はせ、夫婦之理を成しき。

時に嶼子、旧俗を遺れ仙都に遊び、既に三歳のほどを
逕ぬ。(新編日本古典文学全集本『風土記』、476頁)

嶼子は、独り海に出て、「五色の亀」を釣り上げ「寐つるに」、
亀は「婦人」(亀比売)に変身し、出会った事情を説明した上で、
嶼子に求婚する。嶼子が承諾すると、「蓬山」に赴かむ」とい
つて嶼子を眠らせ、瞬時に、海上の「博大之嶋」に到着する。
そして、亀比売の家を訪れて、右のような展開となるのだが、
「忽に懐土之心を起し」、「暫本俗に還り二親に奉拝まくほり」
して、筒川に戻ってみると、「蓬山」(「仙都」とも表記)で「三
歳」過ぎす間に、人間世界では「三百余歳」が経過していた、
と記されている。

帰還した故郷は、「一親にすら会はず」という状態で、「亀
比売」に思いを馳せるあまり、「君終に賤妾を遺せず、眷り
尋ねむとおもはば、匣を堅握めて、慎な聞き見そ」と、禁止
して渡された「玉匣」を開けたところ、「芳蘭之体、風雲の
むた翻りて蒼天に飛びゆき」、「かへりてまた会ふことの難
き」状態となる。

この「玉匣」に入っていた「芳蘭之体」は、人間世界に戻
った嶼子が、「蓬山」の亀比売と再会するための必須条件で
あった点に重点が置かれているのであり、開封後の嶼子の身
体の変化については、記されていない。

三浦佑之氏は、「玉匣」の中には、地上の時間の経過から
島子を守るために、島子の魂が封じ籠められていた(92頁)
のであり、「箱を開くという行為は、島子の魂と肉体が、過
ぎ去った地上の時間である三百年を瞬間的に浴びる」(93頁)
ことであって、「若々しい肉体が瞬間的に消滅してしまった」
と指摘されている。とすると、「玉匣」中から「蒼天に飛び」
去った「芳蘭之体」とは、嶼子が体得していた「蓬山」の特
質である、「不老不死」であったと考えられるのであり、そ
れを永遠に喪失したことを意味しているのであろう。

「蓬山」での「三歳」が、人間世界の「三百余歳」に相当
するという、異郷と人間世界とで、時間の流れが相違する事
例は、典型的な類型なのだが、嶼子は「蓬山」で、如何にし
て「芳蘭之体」(不老不死)を体得したのかを考えると、「仙
薬」のことは記されておらず、「百品の芳き味」を賞味し、「坏
を挙げ献酬」したことが記されている。すなわち、嶼子の場
合、「蓬山」の住人となり、不老不死を体得できた理由は、「蓬

山」の「食物」を撰取したことであったといえよう。⁽¹⁵⁾

右の「逸文」と同じ伝説を踏まえて詠作された、高橋虫麻呂の『万葉集』長歌1740番歌「水江の浦島子を詠む一首」（新編日本古典文学全集本）には、「海界を 過ぎて漕ぎ行く」うちに、「海神の 神の娘に」偶然に出逢い、契りを結んで、「常世に至り 海神の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり 二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを」、「父母に 事も語ら」うための 一時的な帰郷を望み、戻ってみると、滞在「三年の間」に、「家も見かね」「里も見かね」る状態になっていた（人間世界での経過年数は、不記載）と、様変わりした故郷の様子が詠まれている。

そこで、「常世」に また帰り来て 今のごと 逢はむと ならば この櫛笥 開くなゆめ」と、「常世」に戻って「神の娘子」と再会するためには、開けてはならないとの禁忌よりも、「開きて見れば もとのごと 家はあらむ」と、両親に対する愛着が優先されて、「玉櫛笥」を少し開けた結果、「白雲」が「常世」に たなびいた。その後の「島子」の様子は、「若かりし 肌も皺みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後遂に 命死にける」と、具体的に

記されている。すなわち、「玉櫛笥」には、「島子」の体得した「常世」の特質である「不老不死」が、封印されていたのであり、それを開いて喪失した時、人間世界の歳月が、「島子」の身を襲い、地上に回帰し得た結果として、死が訪れるのである。

「逸文」と比較すると、「浦島子」の居住地が「墨吉」となり、「亀」を釣ったことが記されない等、相違点も散見されるのだが、不老不死の仙界訪問譚であることに、相違はない。ただ、滞在中の生活に関する叙述は、「妙なる殿に 携はり 二人入り居て」としか記されておらず、不老不死になるための条件である「仙薬」の服用や「食物」の撰取は、明示されていない。

だが、「常世」で夫婦の契りを結んだ仙女から、人間世界の時間に回帰するための手段となる「玉櫛笥」を与えられているのは、「逸文」の場合と同様であり、滞在が同じく「三年」に亘っていて、「仙薬」の服用が明示されていない以上、「筒川の嶋子」の場合と同様に、飲食による「食物」の撰取が、不老不死を体得した理由であると、考えてよいように思われる。

次に、垂仁天皇の御代に、「非時香菓」（橘）を求めて「常

世国」に派遣され、帰国した田道間守の事例を、検討してみたい。

明年（百年）曾根注）の春三月の辛未の朔にして壬午に、田道間守、常世国より至りたり。則ち齋せる物は、非時香菓、八竿八纒なり。田道間守、是に泣ち悲歎きて曰さく、「命を天朝に受りて、遠く絶域に往り、万里に浪を踏み、遙に弱水を度る。是の常世国は、則ち神仙の秘区にして、俗の臻らむ所に非ず。是を以ちて、往来ふ間に、自づからに十年を経たり。豈期ひきや、独り峻瀾を凌ぎ、更本土に向むといふことを。然るを聖帝の神霊に頼りて、僅に還り來ること得たり。今し天皇既に崩りまし、復命すこと得ず。臣生けりと雖も、亦何の益かあらむとまをす。乃ち天皇の陵に向ひて叫哭きて、自ら死れり。（新編日本古典文学全集本『日本書紀』・垂

仁天皇百年条、336頁）

田道間守が垂仁天皇の命を受けて、「神仙」が隠れ住み、俗の臻らむ所に非ざる「永遠不変の国、不老長生の国」（335頁頭注一六）たる「常世国」に、苦勞を重ねて到着し、「非時香菓」を入手し、その往復に十年を要して帰国した時（派遣は「九十年の春二月」、天皇は前年七月に崩御しており、

復命を果たせなかったことを悲嘆して、御陵で殉死している。

問題は、「弱水」（崑崙山の下を流れる川）を渡り、「神仙の秘区」である「常世国」に辿り着いた田道間守が、「不老長生」の身となり得たのか、否かである。右の記述も、同内容の簡略な記事を載せる「古事記」も、共に明記していない。田道間守の「常世国」滞在は、帰還を鶴首する垂仁天皇に対する配慮から、「非時香菓」入手のための交渉等、必要最小限の時間であつたらうし、その間に、「仙菓」の服用や「食物」の摂取がなされたのか否か、不明なのだが、命じた天皇を差し置いて、臣下の田道間守だけが、「不老長生」の身となることを受け入れたとは、考え難いように思われる。

加えて、「常世国」の特質を体得していたのなら、彼我の時間の流れの差異に基づいて、田道間守の帰国の時期は、後の天皇の御代になる等、大幅に延引してははずなのだが、そのようには記述されていない。すなわち、田道間守は、「不老長生」の特質を体得してはいない、と考えられるのであり、「常世国」に赴き、どの程度か不明ながら、必要最少限の時間滞在しただけでは、体得することにはならない、と考えるのである。

また、仙界ではないのだが、赴いた異郷の住人となるため

に、要請される条件を考える時、伊耶那美命の黄泉国での事例が、手懸かりになるように思われるので、『古事記』を引用すると、次のように叙述されている。

是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。爾くして、殿より戸を際ぢて出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊耶那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。(新編日本古典文学全集本、45頁)

伊耶那美命は、「火の神」を産んだことが原因で「神避り」、「穢き国」(49頁)「穢れ繁き国」(51頁)である、「黄泉国」に赴くことになる。夫の伊耶那岐命は、妻との「葦原中国」作りが未完成であるため、「黄泉国」を訪問して帰還を要請したのに対して、承諾するのだが、到来が遅かったために「黄泉戸喫」を済ませて、この国の住人になりおおしてしまっていた。そのため、国を統括する「黄泉神」と相談することに

なるのだが、この事例からは、赴いた新たな国の食物を摂取することで、その土地の制度・慣習に取り込まれることが判明するのである。

以上の事例に基づいて考えると、異郷に赴いた人間世界の者が、異郷の特質を体得して「不老不死」になった上で、人間世界へ帰還する時、『丹後国風土記』逸文の「筒川の嶼子」や『万葉集』170番歌の「墨吉」の「鳥子」のように、その特質を喪失して人間に帰還する手段としての「玉匣」(玉櫛笥)を付与されているのであり、体得していない場合に、その付与は不要であつたらう。

田道間守が、「神仙の秘区」である「常世国」から、本朝に帰還する時、特別の物品が付与されたことは記されておらず、帰国後にも、人間世界へ帰還する記述がない以上、「不老不死」を体得してはいなかった、と考えてよいように思われる。

このような事例に基づいて、庫持皇子条を読み解く時、皇子は、虚言ではあるものの蓬萊山に赴き、上陸はしたのだが、仙女「うかんるり」に蓬萊山であることを確認し、山裾を辿って、「いとわろか」る「蓬萊の玉の枝」を入手し、帰国の途に就いている。その滞在時間は数時間と短く、「仙葉」の

服用や食物の摂取は、叙述されていない。

加えて、「筒川の嶋子」や「墨吉」の「島子」の場合のような、「玉匣」（玉櫛筒）の付与という、人間世界の時間に帰するための特別の手段の付与が記されていない以上、庫持皇子は、蓬萊山で「不老不死」を体得してはいなかったと思われるのであり、人間世界の時間のままで帰国の途に就いたのであって、彼我の時間の流れの差異による混乱は、生じていないと考えるのである。

それ故に、庫持皇子の贖「蓬萊山訪問談」を室内で聞く、かぐや姫は、「蓬萊の玉の枝」の説明に加えて、蓬萊山訪問の時間の経過に関しても、違和感を抱くことなく、皇子の話を矛盾のない真実として受け留め、姫の結婚の危機的状況は、更に、回避できない絶体絶命の段階へと深化しているのである。そして、翁と庫持皇子との間で、この間の辛苦をめぐる和歌の贈答がなされた時、皇子とかぐや姫との結婚は、不可避の既定の事柄として、確定するのである。

かぐや姫が、庫持皇子提出の贖物の「蓬萊の玉の枝」を、本物と信じ込む物語展開は、以上のように緻密に構成され、語られていると考えるのである。

尚、以上のように考える時、仙界に赴いた人間が、「不老

不死」の特質を体得する条件は、「筒川の嶋子」の場合は、「百品の芳き味」を賞味し、「坏を挙げ献酬」しているし、伊耶那美命の場合は、死者の「穢き国」である「黄泉国」で「黄泉戸喫」をして、その住人になりおおしていることから、赴いた異郷の「食物」を摂取することであつたと思うのである。そして、『竹取物語』以前の本朝の資料には、「仙薬」服用による事例は、確認されないのである。

六

かぐや姫と庫持皇子の結婚が確定した直後、物語は急展開し、翁邸の庭に「をとこども六人」が登場して、内匠寮の漢部内麻呂が文書を差し出し、「玉の木を作り仕うまつりしこと、五穀を断ちて、千余日に力をつくしたること、すくなからず。しかるに、禄いまだ賜はらず。これを賜ひて、わるき家子に賜はせむ」と申し出る。すなわち、ほぼ三年に亘った贖物「蓬萊の玉の枝」作製の対価を、皇子本人に請求するのではなく、翁家に請求しに到来するのだが、その理由・契機は、何であつたのであろうか。

「鍛冶工匠」が提出した文書には、次のように叙述されている。

皇子の君、千日、いやしき工匠らと、もろともに、同じ所に隠れあたまひて、かしこき玉の枝を作らせたまひて、官も賜はむと仰せたまひき。これをこのごろ案ずるに、御使とおはしますべきかぐや姫の要したまふべきなりけりとうけたまはりて。この宮より賜はらむ。(34頁)

「鍛冶工匠」は、庫持皇子の依頼で作製した「玉の枝」が、かぐや姫が皇子に結婚の条件として課した物品であったことを、生駒山中から都に帰還後の、「このごろ」に知ったためであると説明する。庫持皇子の難波出航は、筑紫国での湯治という、病氣療養が目的であることを、「鍛冶工匠」は、事前に依頼されていた「玉の枝」作製のための準備に専念していて、知らなかったのであろう。

それが、「玉の枝」を完成して都に帰還した後、庫持皇子が難波の港から都を目指していることに関する世間の人々の噂、「優曇華の花持ちて上りたまへり」を聞き、三年前の皇子の難波出航が、蓬萊山訪問のためであり、依頼されて作製した「玉の枝」は、かぐや姫との結婚の条件であったことを知ったのであろう。

「玉の枝」作製の依頼者は、庫持皇子であり、当事者である皇子が自邸に戻るのを待って、請求するのが自然であるの

に、何故に「鍛冶工匠」は、翁邸に押しかけ、「禄」を請求するという行動を取ったのであろうか。

奥津氏は、庫持皇子の「ちよつとした心驕り、職人たちへの禄などいつでもいいという思いが致命的な失敗につながった」(305頁)のであり、「不用意の事故のために失敗に終わる」策士策に敗れる人間を主題とした物語(306頁)であると、指摘されている。

これは、庫持皇子側からの理由の説明にはなっているものの、「鍛冶工匠」側の説明にはなっておらず、その視点が欠落しているのである。

「鍛冶工匠」は、庫持皇子と「千日」「もろともに、同じ所に隠れる」て、「玉の枝」を作製したのである。生駒山中の狭隘な住居で、三年に亘る共同生活をしたことは、両者の身分差からすれば、あり得ぬ事態であったろう。

庫持皇子は、別邸で暮らすのが、本来のあり方であるが、「たはやすく人寄り来まじき家」は、辺鄙で狭隘な土地に建てられたものであつたらう。それでも、三年に亘る共同生活を送る過程で、両者間に精神的な交流が生じ、信頼関係が構築されてきたなら、「鍛冶工匠」の行動は、生じ得なかつたであらう。こうした信頼関係の欠如が、「鍛冶工匠」の行動の基

底にあったと思うのである。

「玉の枝」依頼の経緯を知った「鍛冶工匠」が、富裕な豪族である翁に、作製の「禄」の請求に赴くことになった直接の契機は、庫持皇子が翁に語った「難波より、昨日なむ都にまうで来つる」という、皇子の行動にあったのではあるまいか。

世間の人々は、庫持皇子が「優曇華の花持ちて上りたまへり」と噂し合い、かぐや姫が「我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり」と塞ぎ込む展開に続く、「かかるほどに、門を叩きて、「庫持の皇子おはしたり」と告ぐ」という叙述は、皇子が都帰着後、自邸に立ち寄る時間を惜しむとともに、姫に対する愛情と誠意の深さを訴えるために、時を措かず翁邸に直行したと、読者が読解するように仕向けられているのだが、この皇子の発言に依れば、実際は、翁邸訪問の前日に、既に都に帰着していたのである。

庫持皇子は、何故に、都に帰還した「昨日」、自邸に帰らなかったのであろうか。その理由は、明記されていない以上、推測するしか方法はないのだが、都帰着が夜であったとしても、自邸に帰るのが自然である。それをしなかったのは、「心たばかりある人」としての庫持皇子の、かぐや姫に対する愛

情と誠意の深さを訴えるための、緻密な計算に基づいた行動であることを前提として、加えて、帰着当日の自邸の方角か、翌日自邸から翁邸に赴く方角が、陰陽道の方角神である天一神（中神）が遊行する方塞に当たっていたために、自邸に帰ることを回避した可能性も考えられよう。

ともあれ、庫持皇子は、愛情と誠意の深さを訴えることに加えて、天一神が巡行する方塞のためもあつてか、自邸に帰らなかったのである。庫持皇子より先に都に帰還し、三年に亘る「玉の枝」作製の対価としての、「禄」の受け取りを鶴首していた「鍛冶工匠」にとって、皇子が都に帰還しながら自邸に帰らず、旅宿か知人邸に滞在したことは、信頼関係の欠如に加えて、皇子による「禄」の付与に関する疑念を昂じさせ、作製した「玉の枝」は、かぐや姫が所望した物品であることから、確実に受け取る方法として、皇子の滞在する翁邸に請求することにしたのであろう。

庫持皇子が、「昨日なむ都にまうで来つる」と翁に語ったことは、「鍛冶工匠」が翁邸に「禄」の請求に到来する、直接の契機として機能しており、そうした物語展開を惹起する伏線の役割を果たしている、と考えるのである。

以上述べてきたような事情で、かぐや姫との結婚を成就できなかった庫持皇子の後日談は、次のように叙述されている。

かくて、この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天下の人の、見思はむことのはづかしきこと」とのたまひて、ただ二所、

深き山へ入りたまひぬ。(36頁)

庫持皇子は、従者を連れずに唯独り、「深き山へ入る」行動を取ったというのは、『伊勢物語』第六〇段「尼になりて山に入りてぞありける」(新編日本古典文学全集本、162頁)を踏まえると、新編全集本が指摘するように、「当時の用法からすれば山寺に入ったということ」(37頁頭注一二)、すなわち、出家した⁽⁸⁾ということなのであろう。換言すれば、出家せざるを得ない程の「一生の恥」、恥辱に塗れたというのである。それは、かぐや姫との結婚を果たせなかったことだけでなく、「天下の人の、見思」うことに対する畏怖が原因であった。

庫持皇子とかぐや姫の養父である竹取翁との身分差は、皇子と「鍛冶工匠」の場合と同様に大きく、姫は「御使」と表現され、「正式の妻と世間から公認されるわけではない」(日

本古典集成成本、30頁頭注五)し、「北の方ではなく身のまわりの世話をする一段下の待遇の妻」(新編全集本、35頁頭注九)である、「召人」にしかなり得ない立場なのである。

そのかぐや姫を、贖物の「玉の枝」で欺いて結婚しようとして、その企みが露見したことを恥じ入るとともに、その庫持皇子の行為を聞き知った「天下の人」が、嘲笑することに恐れ戦いている。具体的には、筑紫国での湯治の許可を得て、難波の港から出航しながら、実際は、生駒山中で、「蓬萊の玉の枝」の贖物を「鍛冶工匠」に作製させていた、庫持皇子の虚偽申請が露見してしまい、貴族社会における信頼を、失墜してしまったこと。そして、庫持皇子が都に運ぶ長櫃のものは、「優曇華の花」であると大騒ぎした世間の人々が、皇子のかぐや姫に対する欺瞞行為を嘲笑すること。この貴族社会と庶民社会の双方から人格を否定されるという、この上ない恥辱に塗れ、羞恥心を抱く庫持皇子には、「ただ一所、深き山へ入りたまひ」、「年ごろ見えたまはざりける」という行動を取るしか、術がなかったのであろう。

註

(1) 「月の都」の人たるかぐや姫が、「罪」を犯して追放さ

れた人間世界に存在する物品について、天竺と蓬萊山については、実見しておらず、唐土と国内については、実見していたというように、区別して叙述しているのは、難題設定上の矛盾であろう。

月の都の人は、人間世界の全てを熟知していたとすれば、二事例の伝聞表現が齟齬するし、かぐや姫が翁邸で過ごす三年間に、知識を身に付けたとすれば、唐土に渡航していないのに、「火鼠の皮衣」を実見していたことが、齟齬する。

こうした矛盾は、『竹取物語』が執筆された九世紀後半時点での、対外交流の実態が反映された結果であるように思われる。

(2) 奥津春雄氏「車持皇子の人間像」(『竹取物語の研究―達成と変容』翰林書房 二〇〇〇年二月)。本稿中の氏の論文引用は、特記なき限り、すべてこれに依った。

(3) 「蓬萊の玉の枝」の形状は、中川浩文氏「竹取物語の表現―仏教典籍の表現の投影とその意義」(『竹取物語の国語学的研究』思文閣出版 一九八五年三月)が指摘されるように、『仏説無量寿経』の無量寿仏の国土では、「七宝」の内の一種類でできた樹の他、「有二宝

三寶乃至七宝転共合成」(大正新脩『大藏経』第12巻、270頁)の樹もあり、直接的には「或有宝樹。紫金為本。白銀為茎。琉璃為枝。水精為條。珊瑚為葉。瑪瑙為華。車渠為実。或有宝樹。白銀為本。琉璃為茎。水精為枝。珊瑚為條。瑪瑙為葉。車渠為華。紫金為実」の「表現を投影」(231頁)して、形成されているのであろう。

ただ、「玉の枝」の「実」が、稔るために必要な葉と花に関する説明はなく、提出された物品の真贋を判断する際も、問題にされていない。その理由は、蓬萊山に自生する「玉の枝」の高貴性を、人間世界で最も高価な宝物である金・銀・真珠に限定し、象徴させたためであろうが、かぐや姫は、「それ一枝折りて賜はらむ」と発言しており、枝の途中からも根が生える形状でない限り、提出の対象から「白銀」は、除外されていたことになろう。

(4) 庫持皇子が翁に対して、贗「蓬萊山訪問談」を語った場所が、かぐや姫の部屋の前(の簀子)であり、室内の姫が聞き耳を立てていた両者の位置関係は、「鍛冶工匠」六人による「祿」請求に依って、真実を暴露された皇子が、「立つもはした、あるもはしたにて、おたまへり。

日の暮れぬれば、すべりいでたまひぬ」と記され、夜陰に乗じて抜け出したことからも確認されよう。

- (5) 『中国古典文学大系 老子・莊子・列子・孫子・呉子』(平凡社 一九七三年六月)で、福永光司氏は、『列子』の「珠玕之樹皆叢生」の口語訳に付注して、『淮南子』地形訓と『爾雅』釈地篇の、崑崙山に自生する仙木の叙述を引用し、「本来、崑崙山に生ずるとされる珠玕の樹を蓬萊などの五山に生ずるとしているところに『列子』の記述の後次性がうかがわれる」(注三八、300頁)と、先後関係を指摘されている。

尚、『爾雅』の叙述には、「西北之美者。有崑崙虚瑇瑁琅玕焉」(『四部備要』第二冊、62頁。中華書局 一九八九年三月)とあり、仙木の個別の名称を挙げずに、「瑇瑁」(美玉の樹)と「琅玕」(玉に似た樹)という、総括的表現を使用している点で、『列子』の叙述と酷似しており、これに依拠した可能性があろう。

- (6) 東望歩氏『『竹取物語』蓬萊訪問譚の再検討―典拠・話型・主題』(『中古文学』第80号 二〇〇七年二月)。
本稿中の氏の論文引用は、すべてこれに依った。

- (7) 『竹取物語』の時代設定は、註(2)前掲書で、奥津

氏「石上麻呂の小心」が、求婚者の「この三人、あるいは五人が揃って権勢を握った時期は、公卿補任による限り大宝元(七〇一―曾根注)年だけ」(348頁)であり、「大宝律令成立の前後こそ、最適な時代設定と考えられる」と指摘される通りであるが、物語の細部は、弘仁元(八一〇)年三月に設置された「蔵人所」の「頭中将」が登場する等、平安時代の制度・風習に基づいて叙述されていることを確認しておく。

- (8) 関根賢司氏「月の都 竹取物語のトポス」(『竹取物語論 神話／系譜学』おうふう 二〇〇五年五月)。初出は一九九三年。

- (9) 小川環樹氏『中国小説史の研究』(岩波書店 一九六八年一月)

- (10) 中島長文氏『任昉述異記』校本』(『東方学報 京都』第七三冊 二〇〇一年三月) 402頁。

- (11) 『太平寰宇記』卷九七の引用は、註(10)前掲「校本」の「校記」に依る。但、中国古代地理總志叢刊本(中華書局 二〇〇七年一月)には、「童子数四弹琴而歌」(194頁)とある等、本文の異同が散見される。

- (12) 『王氏合校本水経注』第四冊(台湾中華書局 中華民國

五九年六月台二版）巻四〇、五丁裏。

(13) 三浦佑之氏『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』(五柳書院 一九九〇年二月第二刷)。本稿中の氏の論文引用は、すべてこれに依った。

(14) 註(13) 前掲書で、三浦氏は、「玉匣」を開けた後の老衰した島子は、亀比売と和歌の贈答をしているので、「すぐに死んでしまったのではなさそうであ」(93頁)「り、「地仙か尸解仙になった」(94頁)と解釈されているが、新編全集本では、「本文中では一貫して「嶼子」であったものが歌詠中では「うらしま」(宇良志麻能古)＝曾根注)となっている」(478頁頭注九)ことを根拠に、「歌詠は物語伝承の古型ではなく、風土記編纂時の後補」である、と指摘されている。この説に従い、仙人説は採らない。

(15) 『竹取物語』より成立は下るものの、「延喜二十年庚辰八月朔日」に成立し、「承平二年壬辰四月二十二日」坂上高明が増補した『続浦島子伝記』(重松明久氏「浦島子伝」現代思潮社 一九八一年一月)の叙述では、「澄江」の浦嶋子は、釣り上げた「壺亀」(蓬山の女)と「在昔の世」(前世)で夫婦であり、転生して

「神女」は「蓬萊宮」の「天仙」、嶋子は人間世界の「地仙」となった。再度夫婦となるために、やって来た」と語り、承諾した嶋子は「蓬萊山」に行き、「共に駕衾に入」ることで、「仙薬を服ずして、忽に応齡を驗すべき」(58頁)状態になり、「神女の父母兄弟」と「嘉宴」をする。その上で、「霓裳羽衣」を着て伸び伸び過ぎ、「六甲霊飛」や「万畢鴻宝」の仙書を読誦し、「朝に金丹石髓を服み、是に百種千名を分かてり。暮に玉酒瓊漿を飲み、亦、九醞十句を有てり。九光の芝草は、老を駐むるの方、百節の萑蒲は齡を延ぶるの術なり。一盃の仙薬を飲むの処に、長生の籙を得るなり。九転の霊丹を嘗むるの内に、不死の庭を尋ね」る。元来「地仙」であった嶋子が、「蓬萊山」を訪問して「天仙」の「不老不死」を獲得するための方法は、「仙薬」の服用だけでなく、複合的に叙述されており、「食物」の摂取に限定されていた訳ではなかったことを確認しておく。

(16) 三宅和朗氏『時間の古代史 霊鬼の夜、秩序の昼』(吉川弘文館 二〇一〇年一〇月)は、「貴族から庶民に至るまで、平安京外からの帰京は夜の出来事であった」

(77頁)として、『土左日記』の前任国司一行の「夜になして、京には、入らむと思へば」(新編日本古典文学全集本、54頁)と、『更級日記』の「粟津にとどまりて、師走の二日、京に入る。暗く行き着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば(中略)いと暗くなりて、三条の宮の西なる所に着きぬ」(新編日本古典文学全集本、293頁)の事例を指摘するとともに、『今昔物語集』の3事例を引用しておられる。

この慣習を、藤原京に時代設定する当該作品に適用できるのか、という問題については、註(7)で指摘したように、時代考証が厳密になされて設定されてはおらず、平安時代の制度・風習に基づいて叙述されているので、右のように考えておく。

(17) 陰陽道の「方塞」は、平安期に入ってから風習であるが、註(7)(16)と同様の事情で、このように考えておく。

(18) 『竹取物語』の奈良絵本・絵巻の管見に入った伝本の図絵としては、慶應義塾図書館蔵屏風本(原本は絵巻。三田メディアセンター/デジタルコレクション「奈良絵本・絵巻コレクション」にて、確認可能)が、庫持

皇子の出家姿を描いている他、物語本文通りに、皇子独りが山中に描かれる構図の架蔵奈良絵本と、皇子の高貴さを勘案して、従者に導かれて山中を移動する構図のめぐろ歴史資料館蔵奈良絵本の3伝本が、知られるのみである。

(本学名誉教授)